



韓国社会の理解と大韓民国の使命

パク チョン キュウ (2002博卒)

(11) 625事変

① 1948年5月10日の選挙と8月15日建国。1949年になると中国の国共内戦と国民党の台湾への撤退。そして、1950年1月12日アメリカのアチソン国務長官の衝撃的な演説があった。米国は「日本・沖縄・フィリピン・アリューシャン列島に対する軍事侵略に反撃する」。所謂アチソン・ラインの中に韓国と台湾は入っていなかった。戦争を準備していた金日成 (キム・イルソン) は喜んだ。

まず金日成は中国人民解放軍の朝鮮族6万人を北韓軍の最前線に配置させた。625事変(日本では朝鮮戦争というが)への準備である。実際、中国人民解放軍の朝鮮族部隊は戦争の経験が多くて戦争が始まったら早いスピードで韓国の西南部まで占領した。

金日成はまたソ連のスターリンから戦争する許可を得た。それで、ソ連の軍事顧問団が南侵作戦計画案を立てた。スターリンの考え方は中国と米国が戦争したら、ソ連には得になると思った。米国はヨーロッパには手を回すことができなくなり、中国共産党も戦争で弱くなり、共産党のヘゲモニー(主導権)を握ることができるからであった。

1950年6月25日未明である4時、北韓の攻撃が始まった。戦争の話聞いてアメリカのトルーマン大統領はすぐ参戦を決めた。韓国が共産化されたら日本、また他のアジアの国も危ないからである。もちろん、第1世界戦争に参加したトルーマン大統領の経験が作用したかも知らない。もう一つは「赤狩り」として有名なマッカーシーのお陰かもしれない。1950年の2月マッカーシーは政府で共産黨員および支持者があると主張し大騒ぎになった。トルーマン大統領は仕方なく「ダレス (John Foster Dulles)」という積極的反共主義者を国務長官であるアチソンの顧問として任命させた。ダレスは東アジアの政策を握って6月18日韓国を訪問し38線も視察した。戦争が起った6月25日にダレスは日本に滞在したのだ。戦争の話聞いて直ちにマッカーサーに会って、38線を視察した内容をもとでアメリカ政府へ報告書を

送った。それで、米軍の早い参戦が決まった。

今、韓国に起こっている事件についての私なりの理解

② 1987年以降の大統領の対北韓政策と朴槿恵の強硬策

今回は1987年からのいままでの 韓国の大統領の対北韓政策を簡単に見ましよう。それで、彼らの理念（IDEOLOGY）と朴槿恵（パク・クネ）大統領を比べてみましょう。なお、1987年から憲法が変わり5年ごとに直接選挙で大統領を選ぶようになりました。国によって右翼と左翼の定義が異なりますが、私がこちらで使っているときには右翼は反共産主義、左翼は親北韓（親共産主義）だと思ってください。

歴代大統領と重要政策



盧泰愚 ノ・テウ 13代大統領、

在任期間：1988年2月～1993年2月

軍人出身だったので、当然、反共産主義者だと思われる。



金泳三 キム・ヨンサム 14代大統領、

在任期間：1993年2月～1998年2月

朴正熙（パク・チョンヒ）大統領時代、野党の指導者。

一生をかけて朴正熙大統領反対運動をした。

北韓国の金日成（キム・イルソン）と会談を提案したが、94年 金日成が死んだのでできなくなりました。



金大中 キム・デジュン 15代大統領、

在任期間：1998年2月～2003年2月

朴正熙（パク・チョンヒ）大統領時代、野党の指導者。

⇒ 4-5億ドルを国会の承認もなしに勝手に金正日に渡し、北韓が核兵器を作ることに貢献しました。

⇒ 北韓の開城（ケソン）に工業地区を作り北韓労働者に賃金を払うようにしました。ほとんどの賃金は北韓政権のものになります。

⇒ 金剛山（クムガンサン）観光を開始し、北韓政権にお金が入るようにしました。

⇒ 左翼教育団体である「全国教職員労働組合」略して「全教組」が1999年7月合法化されました。「全教組」は韓国の歴史を否定的に教える団体です。



盧武鉉 ノ・ムヒョン 16代大統領、

在任期間：2003年2月～2008年2月

金大中の対北韓政策をそのまま次ぐ。

⇒ 韓国が戦争をするときの作戦権はアメリカがもっています。それを回収するという方針を2007年決めました。2012年から戦時作戦権を韓国が持つようにアメリカと決めました。作戦権を米軍が持つようにしたのは李承晩（イ・スンマン）が作った仕組みであり、韓国に戦争がないようにする仕組みであります。後で述べる機会があると思います。



李明博 イ・ミョンバク 17代大統領、2008年2月～2013年2月

⇒ 2008年7月金剛山（クムガンサン）に観光行った人が北韓軍に殺された事件がありまして、金剛山観光は中止しました。

⇒ 戦時作戦権の返還を2015年にするように延期しました。

朴槿恵が大統領になって時期には、北韓は核兵器を作り実験をして、実際使えるくらいまでの水準になりました。2013年から18代大統領に朴槿恵（パク・クネ）はこの問題についてある程度のきちんとした立場で政策を実施しました。朴槿恵大統領の大事な政策を見ましょう。

⇒ 開城工業の閉鎖して北韓へ入るお金をなくしました。

⇒ 「全教組」が不法労働組合という判決がありました。

⇒ 「統合進歩黨」と言う野党がありました。韓国の政府を転覆するためRO (Revolution Organization) という組織を作ったのが知られて、内乱陰謀罪として強制解散されました。それで、統合進歩黨の国会議員5人が議員の資格をうしなしました。

⇒ 戦時作戦権の変換を延期し、また具体的な時期を決めませんでした。

⇒ 労働組合は産業別労組から企業別組合への転換することが出来るようになりました。産業別労組は例えば自動車部品メーカーであればみんな一緒に同じ労働組合に

入る制度です。それで、交渉力を高くする方法です。アメリカでは全米自動車労働組合（UAW、United Auto Workers）が有名です。そこで、ある企業の労働組合が産業別労組から脱退できませんでした。それをできるようにしました。組合と企業との関係は仲良くなるどころも増えると思います。

⇒ THAADミサイルを配置するように決めました。

⇒ 韓国と日本の中で秘密軍事情報保護協定を締結しました。

朴槿恵大統領の政策を簡単に話しましたが、朴槿恵大統領は理念（IDEOLOGY）に関する問題を避けないうま真正面でぶつかりました。つぎからは実際の今回の事件がどんな風に展開したのかについて話したいと思います。



<挙手敬礼する朴槿恵大統領>

(つづく)

明治学園中高等学校出前講義・TOTOミュージアム合同見学会 関門海峡歴史探訪ウオーク

九州支部では去る平成28年12月10日、11日に秋の行事を行いました。今回は、北九州の明治学園中高等学校にてエネルギーに関する講義と実験授業を行うとともに、TOTOミュージアムの合同見学会を行いました。16名の会員の皆様と、明治学園から24名の生徒さんと2名の先生がご参加下さいました。以下概要をご報告いたします。

出前講義は、明治学園の理科教室をお借りて実施しました。まず、蓮尾昌裕教授(1986年卒)から京都大学の概要をご紹介頂き、京都大学の学問に対する真摯な姿勢や自由な校風など京都大学の魅力をご説明頂きました。その後、本題の講義では、藤川卓爾さん(1967年卒)が、人類が有史以来どのようにエネルギーをあやつってきたか、技術イラストのみならず、平安朝の絵巻物やドンキホーテの挿絵などさまざまな資料を用いながらおもしろくご説明下さいました。



後半の実験タイムでは、ミニ風力発電機、簡易直流モーターの試作に生徒さんと共に挑戦しました。今回は、指導を担当する会員が事前に予行演習を行い、初心者が陥りそうな問題点を洗い出しておいたので、生徒さんへの試作指導もスムーズに行えました。参加した生徒さんの半数は中学生で、風車の製作では慣れない工作に苦戦しておられました。簡易直流モーターの試作でも、設計どおり製作したつもりでもなかなか思うようにモーターが回りません。失敗を繰り返しながらコイルのバランスや接触部の構造を改良して最後にうまくモーターが回ると、満足そうな表情を浮かべておられました。ものづくりの面白さが少しでも伝わったなら幸いです。参加者も中高校時代の純粋な心持ちに立ち返って生徒さんと一緒に楽しい時を過ごしました。



その後、TOTO(株)殿が新たに開設されたTOTOミュージアムを明治学園の生徒さんと共に見学しました。衛生陶器の需要をいち早く見抜いた創業者が幾多の困難に遭遇しながらも、お客様と品質を大切にものづくりの精神を守り抜いて事業を拡大し、衛生陶器分野のリーディングカンパニーに育て上げてきたこと、現在も衛生陶器のみならずセラミックス分野で世界をリードしていることを学びました。トイレの水流を学べる透明のトイレの模型を生徒さんは大変興味深そうに見学されておられました。

その後、TOTOミュージアムの一室をお借りして、支部総会を行いました。平成28年度の活動と決算が報告され承認されました。次に平成29年度予算方針と予算が審議され、今後もお家族が参加しやすい魅力ある活動を目指し、社会貢献にも引き続き挑戦することを確認しました。更に、新事務局長に入船佳津一さん(1985年卒)を、新事務局次長に長友志朗さん(1999年卒)を選出しました。懇親会は小倉のふぐ料亭「ちよろ松」で行い、ちようど旬となった美味なふぐ料理を皆で楽しみました。



翌日は、関門海峡の歴史史跡を歩いて見て回るウォークツアーを行いました。まず最初に、九州鉄道博物館を訪問し、蒸気機関車や明治時代の客車、電機寝台車

など様々な車両を見学しました。電気機関車の運転台にも上がって見学出来、鉄道マニアの参加者は貴重な体験となりました。その後、ボランティアガイドの案内で昔の高級料亭の三宜楼や、様々な門司の歴史的建造物や街並みを歩いて見学して回りました。その後関門トンネルの人道をとおり、皆で関門海峡の下を歩いて渡りました。世界的にも数少ない海底人道を歩く貴重な経験を皆で分かち合いました。その後下関では唐戸市場で絶品の寿司を堪能しました。一日、関門海峡を皆で楽しみました。



おわり

可変速高速動く歩道について

私の可変速動く歩道との出会いは、1978年頃、スイス、ジュネーブのバツテル記念研究所からもたらされた「可変速動く歩道」の三菱電機への技術の売り込みであった。その内容は、Phase1からPhase4まであり、Phase1は基本技術のみで約1000万円、Phase2では、試作機の製作までの情報が含まれていて、契約金は約1億円ということだった。

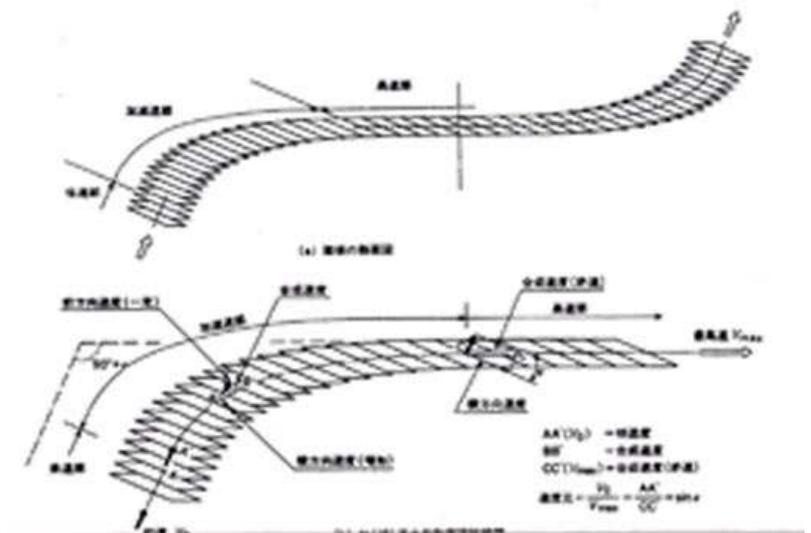
三菱電機ではPhase1のみの契約に止め、可変速技術の検討のみ実施することにした。一方、同じく売り込みを受けた三菱重工業では、Phase2までの契約をしたようであった。三菱重工業では、その後試作機の製作まで進めたことが分かった。

三菱重工技報1995年7月Vol. 32 No. 4に「スピードウオーク」の表題で駆動原理と試作機のことを記載されている。乗降時の速度が40m/minで、高速時の速度が100m/min。日本建築センターの性能評定も終了して公開実験に進むとの記述がある。しかし、その後実用されるところまでは進んだとの情報はない。

バツテル記念研究所が作った実験機が、1978年にフランス中部のナントで見ることが出来るという情報があったので、当時、三菱電機では現地へ実験機を見に行ったが、それ以後検討を進めることはなかった。

可変速機構を用いた高速動く歩道は、技術的な問題よりも需要予測が悲観的だったことが大きく、安全性の問題も大きい。

右図に示されているように、バツテルの可変速機構は、技術的には細長い特殊なひし形のパレットを用いたユニークな変速機構を用いていて面白いが、原理的に乗降時の方向と高速時の進行方向に大きい角度差をつける必要があり、実際に適用するのは、設置条件の点でも非常に難しいと考えられた。



バツテルの可変速原

乗降時と高速走行時の速度比から、ひし形パレットの鋭角 α は数式 $\sin\alpha=40/100$

を用いて算出することが出来る。(40/100は速度比である)

その後、国内では、石川島播磨重工でも、三菱重工とは全く別の方式の可変速機構を用い「高速動く歩道」の開発を進めていて、日本機械学会誌2001年7月Vol. 104 NO. 992で「アクセルライナー」の表題で論文が発表されている。乗降時の速度が40m/min高速時の速度が120m/minとなっている。1998年、試作機製作、実証機1999年10月2000年5月には、建設大臣の認定も取得したとの記述がある。

技術の問題はある程度クリアしたようで、設置上の制約もないようであるが、その後の進展は見られないようである。

海外における可変速高速動く歩道について

フランス パリ モンパルナス駅の高速動く歩道

2002年、CNIMが設計した185mの長さの実験機が1台、パリ メトロのモンパルナス駅連絡通路に設置された。

最初は高速12km/hrで運転されたが、後に安全上の理由で9km/hrに変更になったようである。

駅の連絡通路には、並列に、高速の動く歩道と通常速度の動く歩道が設置されている。



右側が通常速度3km/hrの動く歩道で、左側が高速の動く歩道で、通常速度の3倍の9km/hrで、世界最高速とのことで非常に速く、人身事故続出で、一時運転停止になったが、しばらくするとまた再開することを繰り返していたようである。

高速動く歩道の乗り場と降り場には、スタッフが待機していて、使用できる人か否かを識別して、身体の不自由な人等は通常速度の動く歩道を使用するようにしていたようであるが、日本人の感覚からすると有りえない対応で、これもフランス人らしい。

高速動く歩道の場合は、乗り込んでから10mの区間は加速ゾーンで、金属製のローラーが進行方向に順次速くなるように敷き詰められているようで、まるで荷物を運ぶコンベヤーのようである。

この区間では、通行客はバランスを崩さないように少なくとも片手で手摺を掴むことが必要になる。ローラーの速度が規定の高速になった時点で高速の動く歩道に乗り移ることになる。

高速の動く歩道に移った後は、通常の動く歩道と同じで歩くことも可能である。降り場が近づいて10mの減速区間も、乗り込む場合と同様である。

2011年、RAPT（パリ交通公団）は、運転した9年間に多くの事故があり、利用者の信頼を無くしたので、運転を停止し撤去することを決断した。撤去した後、現在は通常の速度の動く歩道が設置されているとのことである。



(つづく)

チュニジア(Tunisia) (その5)

檜原勇多賀 (S 3 7 卒)

チュニジア滞在中に運良く、週末を含んだ3連休があり、有志5人で2泊3日の旅に出掛けることになった。行き先は、ジェルバ (Jerba) 島である。ジェルバ島は、チュニジア第一のリゾートエリアとして有名な島である。



チュニスからジェルバ島へは、ジェットが飛んでいる。ジェルバ島は、島全体が珊瑚礁で覆われており、起伏は殆ど無く、平らな島である。機が高度を下げて、島の北西部にある空港への着陸姿勢にはいると、平らな島の上に、椰子とオリーブの木が、まるで植林したように一定の間隔を置いてポツン、ポツンと立っているのが眼に入る。

<ジェルバ島だ！ バカンスだ！ 息抜きだ！>

その光景は、これから始まる南の楽園でのページェントを想い、人の心をウキウキさせるに十分であった。

リゾートの空港らしい小さいながら明るく華やいだ雰囲気空港からタクシーでこれから3日間を過ごす我々の楽園”クラブ・メディタレニアン(Club Mediterranean)に向かった。

クラブ・メディタレニアン(地中海クラブ)は、島の中心街オウム・スーク(Houmt Souk)を通り抜けて、さらに海岸沿いに西に半時間のプラーグ・シディ・マハレズ(Plage Sidi Mahrez)の近くにある。

入口にはコンクリートの柱が2本建っているだけの慎ましやかな佇まいで、『Club Mediterranean』の看板がなければ、どこかの保養所と見間違ふ。門のそ

ばに、粗末な黒塗りのバンが2台停まっていて、運転手らしい男が二人、所在なさそうに脇にしゃがんでタバコを吸っている。道を隔てて門の前に小さな店屋があって、絵葉書や土産物を売っている。



ロビーに入る。ロビーと言っても、それは一流ホテルのロビーの感じではない。バス・ターミナルと言った方が当たっている。入口を背にして右手手前に、丸テーブルと椅子が何脚か置いてある。左手手前は事務所で、若い男女が2～3人働いている。左手奥には、切符売り場のような窓口が幾つか並んでいる。その奥はもう、この建物の出入り口になっている。

ここで、先ず最初のトラブルにぶつかった。チェックインしようとしたら、「会員証を見せてください」と言うのである。

「何の会員証ですか？」

「ここは『地中海クラブ』の会員しか利用出来ません」

「でも、我々は電話で予約して来たのです」

「規則は規則ですから・・・・」

「わかりました。それでは、どこか近くのホテルを紹介して頂けませんか？」

「暫くお待ちください」

受付の女性が2～3箇所電話していたが、

「どこも空いていないようです」

と気の毒そうに言った。

「困ったなァ。折角ここまで来たのに・・・・」

我々が途方に暮れていると、彼女は同僚となにやら話していたが、やがてこちらに向き直って、

「狭い部屋でよろしければ、特別お泊めしましょう」

と言ってくれた。

「ブラボー！」

「やったゾ！」

それまでどうなることかと成り行きを見守っていた仲間に明るさが戻ってきた。



チェックインの手続きが済む間、冷たいジュースのサービスがあった。手続きが終わって、係員の案内で部屋のある建物まで歩く。ロビーのある建物を出ると中庭があり、直ぐ大きなプールに出る。プールサイドを通り抜けて右に行くと、テラス風の屋外レストランがある。その中を通り抜けて、テニスコートの脇を通り、小さなプールに沿って左に折れると、右手前方に2階建ての細長い建物が見える。ここに我々の部屋があった。確かに部屋は小さいが、海に一番近いところに位置している。入口の管理事務所からここまで、歩いて優に10分はかかる。敷地の中は想像以上に広い。そして、3つのプールに8面のテニスコートなど、娯楽施設が充実している。



部屋に着いたときは、もう午後1時半になろうとしていた。朝食抜きで出てきたので、皆腹ペコである。荷物を部屋に置いて、早速昼食を食べにレストランに行った。ところが、レストランの入口の鍵が掛かっている。入口のバーに女性が一人いたので聞いてみた。

「食事をしたいのですが・・・」

その女性は、いま日光浴から帰ってきたばかりらしく、むき出しになった大きな乳房を両手で隠しながら、

「7時まで食事は出来ないヨ」

と、気の毒そうな顔をして、首をゆっくり横に振った。

(つづく)

朝永正三先生にとっての工部大学校と東京大学の合併と、その後

藤尾博重（精密工学教室元教官）

(5) 高等教育における数学，大学予科

(5-1) 高等教育における数学

話が脇道に逸れるが、高等教育で微分・積分が数学授業に取り入れられる過程を調べてみよう。高等教育において数学について、(3-2-3-2)で示したように予備門では、微分・積分は講義されておらず、東京大学になって初めて微分・積分が授業科目に取り入れられた。もう少し時代を下がって、数学の教育内容、すなわち、微分・積分がどのように扱われてきたかの変化を見よう。

京都大学機械系工学教室第二世紀記念誌の作成にあたり、筆者は京都帝大時代の古い資料を集める作業の一部を分担した。その際に入手した内容は、「表2a 入学料の推移」，「表2b 授業料（年額）の推移」，「表3a授業科目－明治33（1900）年 機械工学科－」，「表3b授業科目－大正10（1921）年 機械工学科－」，「表3c授業科目－昭和15（1940）年 機械工学科－」（P.81～P.85）の5点であった。入学料（2a）・授業料（表2b）については、学生部より受け取ったデータである。「表3a授業科目－明治33（1900）年 機械工学科－」の内容は、京都帝大創設時のもの（京都大学百年史 資料編 P.449）とは若干異なる箇所があるが、ほとんど同じであって、工学部に保管されている授教簿（成績表の意）をもとにして作成した。もちろん、授教簿は公開されておらず、教室主任の依頼文書を持参して閲覧を乞い、学生の氏名・成績はメモにしないとの条件で、科目名・担当教官・授業時期を記録した記憶がある。

表 17 京都帝国大学 理工科大学 機械工学科 における数学
(京都大学機械系工学教室第二世紀記念誌 P.83 より)

学年	授業科目	担当教官	学修機関	試問	週授業時間	
					第1学期	第2学期
1	数学（積分）	山口 教授	明治 30.9～30.12	明治 30.12.21	3	3
	数学(微分方程式 最少自乗法)	山口 教授	明治 30.12～31.6	明治 31. 7. 2	3	3

この表3aによれば、京都帝大発足時頃の数学の授業は第1学年に限られていた。表17に第1学年における数学分のみを抜粋する（表17）。これによれば、第1学年での内容は、積分、微分方程式、最少自乗法であった。第1学年で積分が講義対象であったことは、微分はそれ以前に教えられていたということになる。

帝国大学の発足にやや遅れて、明治19年4月に新中学校令が公布され、これにもとづいて成立した第一高等中學校における数学の教育内容を表18に示した。これは明治20年1月29日に定められた第一高等中學校規則P.143 本科第三號學科課程表（工学志望生ニ課スル分）P.149（第一高等学校六十年史）からの数学分のみを引用した。ここで、「第三號學科」とは、その記述に続いて「（工学志望生ニ課スル分）」とあり、学生向けの志望、すなわち、法学・医学、工学、文学、理学の各志望を踏もうとする学生への課程表に順に番号を付けていたことによる。表18から分かるように工学志望の学生に対しては、本科第2年でも微分積分法については「大意」が講義された程度であった。なお、高等中學校においては、本科2年間、予科3年間で修業年数であった。

さきの高等中學校令に引き続き、明治27年6月23日高等学校令がだされ、高等中學校は高等学校に改称された。高等中學校の場合と同様に、高等学校における数学の教科内容をみよう。表19は、第一高等学校の工科に属する学生への数学の教科内容を示している。表19によれば第三年級（第三学年の意）において、微分・積分が含まれており、この時点で旧制高等学校において、数学教育として微分・積分が含まれるようになったことが分かる。したがって、創設時の京都帝大における数学の授業内容は、高等学校における微分・積分を前提にしての授業であったといえよう。この検証により、筆者らが経験した（新制）高等学校第2学年に微分・積分の授業がなされたことの原点が、旧制の高等学校発足時にあったことが分かる。

表 18 第一高等中學校 工学志望生に対する数学の教育内容

（第一高等學校六十年史：第一高等中學校規則 本科第三號學科課程表
 {工学志望生ニ課スル分} P.143)

学年	数学の教科内容	週当たりの授業時間数
本科第1年	方程式論，平面解析幾何	3時間
本科第2年	立体解析幾何初歩，微分積分法大意	3時間

表 19 第一高等学校大學 豫科第二部（工科）を対象とした数学教育（P.268）

（第一高等學校六十年史：大學豫科學科程度及組織 P.264）

学年	数学の教科内容	週当たりの授業時間数
第一年級	代數，三角法，方程式	5時間
第二年級	平面解析幾何，立体解析幾何	4時間
第三年級	微分學，積分學，力學	6時間

(5-2) 大学予科

ついでながら、これも余談になろうが、表19の標題にある大学予科について触れておこう。東京大学への入学条件の一つとして、予備門の課程を経ることが必要であったことは(3-2-3-1)で述べた。東京大学が発足するとともに、予備門に代わって高等中学校が設けられ、その後、数年余を経て、高等中学校は高等学校へ編成替えされた。帝国大学発足時には、この高等中学校を卒業することがほぼ必須条件となり、さらに、高等学校が成立した段階では、高等学校に予科が設けられ、この予科を経ることが大学へ進学するための必要条件となって、この条件は1945年の敗戦後の学制改革(1947)まで引き継がれた。

明治27年6月23日に公布された高等学校令(勅令75号)の第二條にはつぎのように定められている。

「第二條 高等學校ハ専門學科ヲ教授スル所トス但帝國大學ニ入學スル者ノ為メ豫科ヲ設ルコトヲ得」

このことについて、京都大学百年史 総説編(P.93)では、高等学校令 第2条の主旨として、「その主たる教育目的は高等普通教育でなく、むしろ各種の専門教育による実務的な人材の養成にあり、したがって、大学進学の前備教育的機能は副次的に認められたに過ぎない」と。

また、第一高等學校六十年史 P.233には、「明治27年7月12日 右の勅令(筆者注：高等学校令の意)に依り、高等學校は専門を主とし、大學豫科を客とするに至る。これ、従来我が國の大學が其の學科の程度の『實業に従事すべき人に取りては高尚に過ぎ、學者たるべきものには尚淺し』とせられたる教育界の定論に鑑みて企てられたる大學學制の改革に伴ふものなり。然れども、文部省はその改革の第一歩として、第三高等學校を以て専門を修めしむるの學舎と為せしに止まり、本校(筆者注：第一高等學校の意)は他の高等學校と共に、醫學部の別置せられしほかは大學豫科に充てらるることとなれり。」と。さらに、「此の日、文部省令第十五號を以て」次のように定めた。

「第三高等學校ニ法學部醫學部工學部ヲ設置シ第一第二第四第五高等學校ニ醫學部及大學豫科ヲ設置ス

此ノ省令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス」(第一高等學校六十年史 P.234)

この方針により、第1高等学校では、他の高等学校(第3高等学校を除く)とともに、予科を設置した。ところが、「第三高等学校に法・医・工の3学部を置き、第一、第二、第四、第五高等学校に医学部と大学予科が置かれた。修業年限

は専門学部4年、大学予科3年となり、高等中学校時代より1年程度延長されたが、これは講座制の導入とともに、高等学校の準大学的な地位をしめすものであろう」と（京都大学百年史 P.89）。また、「明治27（1894）年9月11日開校の第三高等学校には法・医・工の3学部あったが、大学予科はなく、其の他の高等学校が医学部のみを有し、また、大学予科を設置したのとははっきり異なる」（京都大学百年史 総説編 P.90）と。

さらに、京都大学百年史 総説編 P.92には、次のような記述がある。

「大学予科を持たず、また医学部に薬学科を欠く第三高等学校には、旧高等中学校の本科・予科生、および薬学科生を受け入れる場所がなく、全員がその他の高等学校へ転配されることになった。」（京都大学百年史 総説編 P.92）と。この内容だけでは読者は恐らく理解しえないであろう。そこで、京都大学百年史 総説編より引用して、説明を加えよう。

第三高等中学校が改称されて第三高等学校が発足しても、第三高等学校には、法学部・医学部・工学部のみがあつて、予科は存在しなかった。第三高等中学校に在籍した学生はほとんどが大学入学を期していたものの、第三高等中学校が改称された第三高等学校の三つの学部に入籍しても、其の後大学に入れるわけではなかった。つまり、当時へ入学するには高等学校の予科出身であることが必要条件であった。したがって、第三高等学校が発足して、将来大学への道を期していた第三高等中学校の学生は行き場がなく、予科をもつ他の高等学校に移って行かざるをえなかった。その数は第三高等中学校 本科・予科に在籍した学生457名のうち292名が他の高等学校などに編入することとなった。この数は在籍者の2/3にも上ったという。このため、第三高等学校が発足した時点で、第三高等学校は他の高等学校に比して学生数が最下位であったという（京都大学百年史 総説編 P.92）。このような事情により、やがて第三高等学校の三つの学部の再編が俎上に上がり、「明治29（1896）年6月の高等学校長会議は、高等学校における専門学科の廃設を議した」という。これを承けた6月4日付の文部省通牒により、明治29年度の法律学科、および土木工学科、機会工学科の生徒募集が見合されることになった。開設後2年、まだ1人の卒業生も出さぬうちに早くも3学科の廃止が打ち出された。」（京都大学百年史 総説編 P.94）

ところが、工学部に関しては、二つの学科、すなわち土木工学科と機械工学科がいつれなくして行く方針でありながら、新たに応用化学科と採鉱冶金学科が設置されたという。こういった複雑な事情を掲げながらも、結果的に明治30（1900）年4月17日には第三高等学校に予科を設置することになった。なお、工学部応用化学科、採鉱冶金学科は明治33年7月の卒業式をもって、京都本校の専門学部は消滅

したと。また、その後（明治34（1901）年4月1日）、他の高等学校においても、医学部は各高等学校から独立した医学専門学校へ改編されたと（京都大学百年史総説編 P.95）。

この上述のことに関して、第一高等学校六十年史P.234 には、次のように記してあり、その記述は第3高等学校のことを指している。

「然るに後これらの専門部は漸次廃絶に帰し或ひは独立し、高等學校は事実上大學豫備科となるに至りしものなり。」

(つづく)

泰山会（昭和31年卒業）の今後の案内

当泰山会は平成28年10月13日大阪倶楽部の集まりをもって全国的な集まりは終了したが（下記写真）、首都圏、関西圏、各地域の集まりは関東泰山会（年2回、幹事・戸田凱夫君）、近畿泰山会（年4回、幹事・橋本昌君）として継続して行くこととなった。地域を越えての参加も歓迎されるので次回開催の時・所は各幹事に連絡されたい。

（赤松

記）



